



生活者が主体にならなければ“生命圏の持続”は難しい CITIZEN-ORIENTED DEMOCRACY IS VITAL FOR “SUSTAINABILITY”

気象による巨大災害が地球規模で頻発し、激しさを増している。日本列島も連日の猛暑後、未曾有の豪雨に見舞われた。半径6,400km程の地球の表層の限られた生命圏で、温室効果ガスを増やし、緑を減らしているのだから、異常気象が起きるのは当然で、これは正しく人災である。清貧に生きる人を除いて、誰もが加害者であり被害者で、弱者により多く降りかかる。

このような事態を打開しようと、1992年の地球サミットで国連気候枠組み条約を採択し、1994年から国連気候変動会議(COP)を重ねているが遅々として進まない。97年には日本でCOP3が開かれ、05年発効の京都議定書を採択したが、削減義務を負ったのは先進国のみで、米国は経済への悪影響を理由に離脱した。今年11月末から途上国を含む全ての国が参加して、COP21がパリで開かれるが、2020年以降の温暖化対策の新たな枠組みを話し合う段階である。

地球大で対応しなければならぬ問題に、絶対的主権を持った190余の国家が、国益を背負って参加するのであるから、「気候変動枠組条約」は国家エゴで緩いものになり、話合っている間に、炭酸ガスはどんどん増え、共有の棲家は壊れてしまう。現に南太平洋諸国は海面上昇で沈みつつある。生命圏が壊れてしまえば、国家は存在しないのだが・・・。

その国家の壁の中で、この条約を妨げているのは経済である。今の経済には環境の価値が導入されておらず、外部不経済がカウントされないから、炭酸ガスを排出しても咎められず、修復費を払うことはない。言い換えれば、炭酸ガスを出すことによって儲けている。先進国はそうして豊かになり、新興国は排出量を増やして経済成長している。この利益は簡単に手放せない。国の削減目標を低くし、削減が義務にならないようにしている。

地球の汚染総量が自浄力を超えてしまった今、環境の価値を無視した経済を続ければ、生命圏は壊れ、経済基盤が失われるから、経済の自殺行為でもある。既に事例はあちこちに見られるが、目先の経済成長を優先している。今の文明は、自然からの収奪と破壊の上であり、未来の犠牲の上にあること、無数の種を絶滅させ、掛け替えのない地球の生命維持システムまで壊してしまうことを確認する必要がある。

経済と共に未来を奪っているのは軍事である。兵器製造、保管・演習、戦争、戦後修復と4重に環境を破壊する。この軍事に、世界全体で17,760億米ドルを支出しており(2014ストックホルム国際平和研究所)、全世界の正規軍現役兵は2,720万人(2012英国国際戦略研究所)もいる。今の地球に、争って壊してしまう余裕はどこにもない。生命圏を壊してしまつては国家も戦争も平和もない。軍事を縮小し、国家防衛から地球防衛へ移行する時と考える。

このような時、日本は、70年間戦争をせず、1人も殺さず殺されずに済んだ憲法9条を他国に広め、世界平和に貢献すべきだったが、現政権は逆の方へ走ってしまった。9月19日、9条の解釈を変え、集団的自衛権を法制化して、自衛隊が外国で戦争を行えるようにした。日本の敵でなくても、同盟国の敵であれば世界の何処でも戦う国にしてしまった。憲法学者達が違憲と指摘しても聞かず、国民の反対が賛成を大きく上回る中、充分に審議しないまま、強引に決めてしまった。

8月11日の川内原発再稼働に続く、国民を無視した暴走に、政権への不信が募り、これでは国家も国民も大変なことになる、全国各地でデモが起り、今も続いている。いたたまれず個人で参加する人が多く、年齢層も幅広い。デモに行くには選挙に行くより体力がいり、時間も金もかかる。政治家は報酬を得て働き、損得で動くが、この人たちは身銭を切って、立憲主義、民主主義を守ろうとしている。

民主国家と称していても、国家間にはかなりの温度差がある。民が主になるのは容易でないが、主にならなければ、政治はあらぬ方へ向かい、民の無知、無関心、諦めが、それを支えてしまう。政治家も官僚も業者も民(生活者)の1人であるが、仕事となると別人で、往々にして名誉や金や保身のために動く。この別人が国を動かしている所に問題がある。因つて、生活者が政治に関与し、常時監視する必要がある。

生活者は環境悪化を生活の中で感じ、健康で平安に暮らすことを願い、子や孫の未来を案じている。命や自然を大切にするのは別人ではなく生活者だ。民を主にした政治の先に、生命圏への配慮があり、未来が保障される望みがある。子孫も生きられるようにするには生活者が主体になる事が不可欠である。

広島から、上関町祝島を訪ねて思ったこと

WHY HAVE CITIZENS OF IWAI ISLE OPPOSED CONSTRUCTION OF KAMINOSEKI NUCLEAR POWER PLANT FOR MORE THAN 30 YEARS? EXPERIENCE FROM HIROSIMA TO IWAI TRIP



写真1：上関上盛山展望台から田ノ浦と祝島を望む

広島は今年も暑さのなか被爆70年を迎えました。広島
の核エネルギーとの結びつきは深く、8・6 (1945) の世界
初の都市被爆に始まり、1956年には原爆資料館の展示
を取り除き「原子力の平和利用博覧会」が、行政とマスコ
ミだけでなく大学までをまき込み開催、放射能が安全で
夢のエネルギーであると人々に信じこませる役割を果た
してきました。

そして3・11 (2011) を経て、核兵器だけでなく原発を
含む核そのものが人知をこえた作用をもち、地上に非人
道的な影響をもたらすという認識に、ようやく到達しよう
としています。しかしながら、ここに至るには被爆者から
学者までの多大な犠牲と努力があったのですが、それでも
3・11を経なければならなかったという事実があり、われ
われはこれに目を向け反省しなければなりません。しか
も現状は、福島原発災害の調査や事故責任を曖昧にし
たまま、この11日に合わせた川内原発の再稼働とな
っています (2015/8)。

今回は、原発建設で長らくもめていた上関を、現地に
いる卒業生の案内で訪ねたときのメモと感想を記します。

上関原発の建設は、1982年に始まり、住民や環境保護
団体の抵抗や阻止の運動で遅れ、3・11以降、中断され
ています。しかし、この6月中国電力は株主総会で、「脱
原発」議案を否決、原発を安定供給電源とする島根2号
機の再稼働と上関原発建設に全力で取り組むとしていま
す。電力会社がこのように行動するのは、政府が2030年
の電源構成目標に、原発を0でなく20~22%と定めたこと
にただ従っているだけで、政権や行政との馴れ合いと暴
走ぶりを物語っているのです。

さて上関町は山口県東部、山陽本線柳井の南20km、

周防灘に突き出た室津半島の先端部の長島や祝島など
を含み、四国伊方原発や九州国東半島にも近い位置にあ
ります (写真1)。

この港街は歴史と誇りを兼ね備えています。どこで
も同じように漁業と観光だけでの街の維持は難しく、原
発誘致でようやく潤いはじめ、その後の中断で、拡大した
施設の維持に苦しみ、今は静かに時が流れていると感じ
られました。

原発設置の田ノ浦は長島のさらに先端部で、祝島は海
で4kmほど隔てられていますが、船着き場からみると両
者は目と鼻の関係でした。島民の多くは30年あまりにわ
たり一貫して原発建設反対運動を続けていますが、なぜ
社会の流れに影響されずに、粘り強く続けられるのかは、
記録映画「祝 (ほうり) の島」にえがかれたように、この
風土にして、この運動ありでした (WARD37号 2011/3)。

祝島には千年も前に流れ着いた旅人が伝えたという神
舞が受け継がれているように、伝統を重んじる人々の堅
実な日常があります。石と土を積み重ね、漆喰で固めた
練堀 (ねりへい) は、美しい景観だけでなく、屋内を夏涼
しく冬温かくし、強風にさらされる集落を守る役割も担
っています。

島はハート形で周囲は12kmほど、海面から盛り上がった
小山状で、自動車の使える道は限られ、移動は主に歩
き、バイク、手押し車、ハンド・トラクターなどが用いら
れています。農地は、岩や石のある急傾斜地を積極的に生
かした段々畑で、野菜や芋の他、ビワが栽培され、実を大
きくするために選定した枝葉は、農薬を使わないので特
産の「びわ茶」となり、ムシやトリの生態系も豊富で、本
州-台湾を渡る蝶・アサギマダラの休息地として、NHKの
「ニッポンの里山」で紹介されていました (BS3
15/7/28)。

お米があれば安心した生活ができるとする平さんは、
この水の少ない島で、三代にわたり石積み棚田を作りあ
げ、維持しています。重機の使えなかった作業を思うと、
高さ9mにもなる石垣は偉容で、集落から4kmほど歩いて
出会える光景には感動しました (写真2)。

このように島の特徴は、島の経済規模がみなにみえ理
解され、「定常経済」で大切にされるキャップ (上限) が
自然に共有され、伝統が証しであるように、安定と持続



写真2：平萬次さんの美しい石積み棚田と山小屋

が得られ、これらが醸し出す落ち着きは、正に幸せや満足を含む「定常経済」だと思えました。(定常経済は可能だ H. デイリー・枝廣淳子 岩波ブックレット No.914 2014/11)。

ところで、大間原発の対岸に位置する函館について、池澤夏樹氏は(朝日新聞 14/5/17)、函館はリスクと義

務ばかりで、政府による差別がある。原発の経済性は、電力会社とその周辺の人々にとっての話である、云々とし、民主主義の原理、合理と平等に反すると指摘しています。また、内田樹氏は(朝日新聞 14/11/14)、日本は豊かな山河に恵まれており、原子力がなければそれに代わる何かを私たちは見いだす。多くの国民はリスクを受け入れてまで経済成長することよりも、長期的に居住可能な安定した生活を望んでいる。成長なき社会では、顔の見える共同体が基礎単位となる、などとしています。まさにその一つが祝島にあったと感じました。

私としては、政治と行政に、いまの経済成長政策に代えて、各地域にあった定常経済政策の提示を求め、地域の賛同と協力で実践し、できれば成功体験をグローバルに拡げ、世界の経済と環境を、安定と持続に導きたいと夢見ています。

山本禎紀 広島大学名誉教授 WARD理事
SADAKI YAMAMOTO



ミツバチで都市に緑を



VARIOUS GREENERY IN CITY THROUGH BEEKEEPING

2011年3月8日、WARD会長の渡辺英男様始め銀座ミツバチプロジェクトの皆様にご支援を頂き、渋谷でもミツバチプロジェクトを開始しました。その後2012年に笹塚、羽田、2013年に青山、代官山、中目黒、2014年に恵比寿、カンボジアのアンコールワット、2015年に富ヶ谷、川口市に、花とミツバチと共に、人と自然の共生できるサステナブル社会を目指して、ミツバチプロジェクトのコラボの輪が渋谷からも広がっております。

今年、東京の猛暑日が観測史上(140年間)初めて8日間の新記録、同時に熱中症患者も過去最多を記録、また異常気象による自然災害の被害が毎年多くなって来ております。

2020年7月24日に東京オリンピック開会式の開催が決定し、このまま地球温暖化、ヒートアイランドが悪化した場合、訪日された世界の選手や観客の方が万一熱中症で亡くなられるようなことがあれば、世界のトップニュースとなり「おもてなし」で日本をアピールするどころか、なんて暑い国だと日本や東京の価値を落とし兼ねないリスクがあります。

大きな問題ですので一人一人の力ではどうにもならないとあきらめてしまいがちですが、ミツバチ達を見ると、小さな体で一生懸命羽ばたき、力を合わせて生態系の基盤を支えながら人間や生きものに愛を与えて命をつな



明治神宮の里山の菖蒲田で蜜蜂も蜜を集めています。

いで生きています。

2020年明治神宮の鎮守の森が100周年を迎えます。都会のオアシスが都市のヒートアイランドに役立ち、ミツバチや鳥や多くの生きものの生息地になっています。貴重な自然を残して頂いた先人の皆様や守って来られた方々に感謝の心でいっぱいです。

私たちも次世代の人々から、「ありがとう」と感謝される未来を残していけるように、今を生きる一人一人が出来ることを毎日行い、羽ばたき続けられれば、やがて、つながり、広がり、大きな力となり、ヒートアイランドや温暖化が改善に向かうと信じます。

佐藤勝 渋谷みつばちプロジェクト代表 WARD理事
MASARU SATO

第24回WARD総会

24TH WARD GENERAL MEETING

4月29日(祝)、第24回WARD総会が行われた。

総会後の講演会講師に佐々木正己玉川大学名誉教授をお迎えすることから、会場も玉川学園にゆかりの深いさくらんぼホール(町田市の中規模会館)とし、講演の後は、近所に住むWARD副会長の松香宅に会場を移し、庭のミツバチを囲んで?懇親会を持つという、ミツバチに偏った企画で行われた。

総会は定例の議事に続いて、感謝状の贈呈を含め(別掲記事参照)滞りなく進められた後、佐々木名誉教授の講演「次代を見据えた蜜源の森づくり」を拝聴した。

佐々木先生は、この3月同志と図って「みつばち千年の森」というコンセプトで、手入れの十分でない針葉樹林に、ミツバチを含めた多様な生物群がつながりあって生き続けることが出来るように広葉樹を増やしていくという狙いのシンポジウムと植樹大会に参加されたと伺っていた。その考え方は、子孫のために大いに貢献しようとするWARDの目指すところに通ずるところが大きいということから、その活動の紹介をお願いしたところであった。参加者にはミツバチ関係者も多く、また、玉川学園近辺からも参加された方も多かった。したがって、質疑・討論も各自の活動やご意見も多く、充実感が得られたと思われる。引き続き、松香宅に移る間も、路傍の植物を材料に、佐々木先生によるハニーウォーク(蜜源植物ガイド)を経て到着。さらに関連の話題で盛り上がった半日でした。

因みに、松香副会長は、庭に4群のミツバチを飼い、近隣の皆さんと花と人とミツバチをつなごうという「花とミツバチ・プロジェクト」の活動をしている。

下記のブログを参照のこと:

<http://hanatomitsubachi.blog79.fc2.com/>

(写真はいずれも同プロジェクト:江藏 桂氏による。)

WARD 副会長 松香光夫 MITSUO MATSUKA



総会の様子



松香宅の庭のミツバチ

スローガン

SLOGAN

総会で次のスローガン(子孫代理人から自分を含む現代人への呼びかけ)を唱和しました。

1. 子孫が生きられる環境と資源を残して下さい!
2. 負の遺産(有害物、借金)を残さないで下さい!
3. 環境と資源の価値を経済に組み入れて下さい!
4. 全ての価値判断は、現時点ではなく、子孫に及ぶ時間で行って下さい!
5. 資源循環型社会を築き、資源を保全し、環境を改善して下さい!
6. 自然に逆らわず、自然を活用して下さい!
7. 戦争は止めて、軍事費を縮小し、地球環境防衛に注力して下さい!
8. 世界を1つにして、環境改善と資源保全を地球一元で進めて下さい!
9. 未来の人達を苦しめる「原発」を廃止して下さい!

2014年度会計報告

FINANCIAL REPORT 2014 2014.4.1~2015.3.31 単位 円

| 1. 収入の部 | | 2. 支出の部 | |
|---------|-----------|------------|-----------|
| 予算 | 決算 | 予算 | 決算 |
| 繰越金 | 212,854 | 会報費(印刷・発送) | 270,000 |
| 会費 | 400,000 | 会議費 | 70,000 |
| 寄付金 | 400,000 | 事務所費 | 360,000 |
| 雑収入 | 87,146 | 備品費 | 10,000 |
| 合計 | 1,100,000 | 消耗品費 | 10,000 |
| | | 通信費(電話・郵便) | 40,000 |
| | | 交通費 | 10,000 |
| | | 印刷費 | 30,000 |
| | | 宣伝費 | 150,000 |
| | | 調査費(文献他) | 30,000 |
| | | 感謝状贈呈費用 | 40,000 |
| | | 雑費 | 10,000 |
| | | 繰越金 | 70,000 |
| | | 合計 | 1,100,000 |
| | | | 913,536 |

*備考:WARD基金(2002年設立)1,000,000円は別途積み立てである。

2015年度感謝状贈呈

CERTIFICATE OF APPRECIATION FROM DESCENDANTS TO THOSE WHO WORK FOR FUTURE MANKIND, IN 2015

未来の人達に貢献している次の方々へ、
子孫を代理して、WARDから感謝状が贈られた。

Malala Yousafzai

パキスタンで、女の子たちの教育を受ける権利を主張していた14歳のマララさんは、2012年、通学のバスの中でタリバーンに頭部を銃撃され重傷を負った。奇跡的に回復した後も、教育の重要性を訴え、マララ基金を設立する等の活動を止めず、世界を舞台に、学校に行けない6600万人の女の子の声を代弁して活動を続けている。同様な状況にある子供や若者たちに声をあげる大切さを示し、自らの状況を改善することに貢献している。これらの活動が評価され、2014年、ノーベル平和賞を17歳で受賞した。

尾形 剛

建築家でもある尾形さんは、アトピー性皮膚炎などのアレルギー、シックハウス症候群、化学物質過敏症などは住環境が原因と考え、建材・塗料や接着剤などをチェックする一方、食べ物にも大きな要因があると気づき、食のあり方を探求し、啓蒙に努めている。

垣見一雅

ネパールの中部パルパ地方に住み込んで20年、100以上ある山奥の村々を歩き廻って、子どもたちの教育、飲料水や給水設備、学校建設、診療所設置、トイレの普及、コミュニティセンター設立、図書館設立、若者クラブや母親クラブの設立、植林、収入や生活向上のための技術習得など数限りない活動をされ、人々から「OKバジ=OK爺さん」と呼ばれ、皆から敬愛されている。

Dr. Daniel H. Janzen

持続可能な開発の施策や政策提言等を通じ、世界の先進国・発展途上国いずれもが学ぶべき価値あるロールモデルを提供し、世界に発信している。また、コスタリカの生物多様性研究所にて豊かな生物多様性の価値に対する認識を広げ、これを保全すると共に人間の生活の質を高めるというミッションに貢献した。

中村修二

1993年に高輝度青色発光ダイオードの世界初の製品化を実現し、エネルギー変換効率が高く長持ちする白色光源を可能にした功績により、昨年ノーベル物理学賞を受賞した。又、2005年には水から容易に水素を取り出す原理を開発し、水素社会化に寄与している。更に、2007年には光ディスク「ブルーレイ」などで利用されている青紫半導体レーザーよりも低消費電力で長寿命の無極性青紫半導体レーザーを開発するなど、地球環境の保全と資源の温存に貢献している。

トピック TOPIC ドローン DRONE



無人飛行機ドローンの飛行が、首相官邸への落下事件などを受けて規制されることになった。橋の点検や火山の監視、農薬散布、離島への運搬に使われ、活躍の場が多いが、人口密集地での飛行が危険であることや、毒物や凶器の搭載が懸念されている。米国では銃がセットされて話題になった。

ドローンの語源はミツバチの雄である。飛び方や飛行音が似ている。雌（働き蜂）に比べて目玉が大きく、体重は倍あるが、顎と刺針がないので、シーズンオフになると強靱な顎と刺針を持つ雌に巣から追い出される。雄の一部は女王蜂と空中で交尾する機会を得るが、生殖器を渡した後即死墜落する。雄には父親がいない。単為生殖で無精卵が雄になる。怠け者などと邦訳され、生殖以外は用がないといわれているが、それにしては数が多い。3000万年前の化石から発見されているミツバチに無駄があるとは思えない。現に、雄の居る群には病気が少ない。ダニも雄の巣房を好む。寄生虫や病原菌から群を守る働きをしているのではないかと推測される。

この様に、本家も話題には事欠かない。オスは刺針（武器）を持たず、群に身を捧げ、実に優しく、平和に生きている。無人飛行機もそうあって欲しい。



ドイツの平和教育が育む難民問題の意識

HOW IS IT BROUGHT BY GERMAN CITIZEN CONSCIOUSNESS UP?

8月19日から30日まで報告者はドイツハノーバーの生物教育園での体験授業、学生たちのホームステイ体験、そして難民収容センターの視察を行いました。生物や自然のしくみや生活様式の不思議さと美しさに大きな教育的な情熱を持っている教師たちの素晴らしい授業によって年間10万人近くの訪問者が訪れます。生き物をまるごと、ミクロ・マクロ的に観察する時に生物の体やしくみが重大な「意味」をもっていることがわかる教育園になっています。例えば乾燥地、湿地に適応した植物種、明るい光と暗い光に適応した樹種、土壤中の栄養分によってまったく違う成長をする植物群落の変化、土壌の厚さでどのような植物が成長できるか、時間と共に植物群落がまったく違う生存戦略をもつ植物（例えばマメ科植物の共生など）など個々の生態系の違いを環境条件ごとに学ぶ視点をみにつける授業が行われています。そして学習の総まとめとして個々の学んだ知識を総動員して70年間に川と湿地林がどのように変化したことを、学んだことをつなぎ合わせて総合的に学習します。生徒たちはこの湿地林が生態的にどのように変化して成り立ったのかを論理的に科学的に学習者が理解できる野外授業を受けました。ここでは学習者に基礎的な考える材料を掘り起こし、系統的に教材を提示しながら論理的な思考を身につけさせ、多面的な視点が持てるような授業が行われています。

またハノーバー市内には戦中、収容所に市内から移送された6千人の全ユダヤ人氏名が彫り込まれてある平和記念碑があり、ベルリン市内にもみられた記念碑（写真1）はDenkmauer（デンクマウアー）と呼ばれる四角いコンクリート製の石碑が2711基、様々な高さに作られて整然と並べられています。

これは虐殺されたユダヤ人たちの収容所や墓石のイメージや中に迷い込んだら外界と完全に孤立してしまうイメージのほか、平和の中での子供たちの憩いの墓所としても機能をもたせたモニュメントです。

そのほか目立たない街並みの道路にはこの場所からユダヤ人が連行されたという意味の金のマークがみられます。国会議事堂のすぐ近くにもドイツ歴史博物館があり、戦争の被害だけではなくナチスドイツが行った戦争犯罪を詳細に展示してありました。徹底した過去の歴史への反省はブラント首相やヴァイゼッカー大統領の言葉「過去に盲目であるものは未来に対しても盲目である」という信条にドイツ社会全体の常識になっていると感じました。



写真1：平和記念碑



写真2：生物教育園での体験授業

今回、民主的で人権が尊重される社会のあり方を問うドイツ社会の苦悩に直面したのが難民の受け入れについての問題でした。帰国して9月4日に大きく報道されたトルコ海岸でうつ伏せに横たわる難民少年の水死体の写真は難色を示していたイギリスやフランスの難民受け入れの姿勢を認め、「ヨーロッパの良心の問題」であるという世論が起りました。私たちはハノーバー郊外の難民収容施設を訪問し紹介していただいた生物教育センターの教師ヨーク・レーダーボーゲン氏から次のような説明を受けました。「私の両親もチェコからの移民でした。ドイツは歴史の過ちを乗り越え多くの移民たちの協力と共生で繁栄してきた国です。穀物の原産地もシリアなどの中東からのものが多くを占めています。難民たちをできるだけ支援して共生して歩むべきだと思います。」（写真2：穀物の授業をするヨーク氏）また今年だけで欧州への難民申請は45万人に対してドイツは手厚い難民支援対策制度があるため、難民にとって「憧れの地」になっています。しかし、職が奪われるという理由で難民受け入れ反対派に収容施設が放火されるという事件が頻発してしまいました。この事件にドイツの多数派世論は各種メディアから激抗議声明が出されました。

ドイツから帰国する8月27日にドイツ大衆紙「Die Zeit」の一面広告に写真のような行動チャートが掲載されました。（図1）「わたしたちは難民にどのように支援できるか？」という行動チャートが出され、お金、場所、時間がある人にどんな具体的な行動ができるかが示されました。この研修旅行でドイツ国民に環境教育、平和教育がしっかりと根付き、苦悩しながらも合理的で人道的な世論が形成されているという成熟した民主主義国家の底力を痛感しました。

獨協中学校高等学校教諭
塩瀬治 OSAMU SIOZE

WARD 理事



図1：難民にどの様に支援出来るか？

WARD 46号 (2015年10月20日発行)

発行人 渡辺英男 定価150円

編集人 加藤正彦

WARD事務局 〒152-0003 東京都目黒区碑文谷5-4-21

TEL 03-5721-1992 FAX 03-5721-8383

http://www.ward-ngo.com